

2019年度 第5回 ランチタイムフリートーク 報告書

1. 主 催 外国語学部
2. 講 師 名 出口 真紀子 教授 (外国語学部英語学科)
3. 日 時 2019年10月15日(火) 12時45分～13時20分
4. 場 所 2-915 (英語学科会議室)
5. 出 席 者 15名
(出席者詳細は別紙)

6. 内 容

「特権に自覚的」であるための教授法について

「立場の心理学 マジョリティの特権を考える」は2015年からマジョリティーが持つ特権について、自覚してもらうことを目的として開講されている。グローバル化という点において上智大学が他大学とどのように差別化することができるかという議論のなかで、特権というテーマを提案したところ、この講義が科目として採用された。

この講義のなかで特権は、ある社会集団に属していることで労なくして得ることのできる優位性と定義されている。上智大学の学生の多くは、比較的恵まれた社会階層で育っているため、自分が持つ優位性について無自覚であり、そのことを「普通」と捉えている。この講義では、マジョリティに属する学生にできるだけ多く参加してもらい、彼らにとって当然のこととなっている特権を自覚してもらうことを目的としている。講義名を「立場の心理学 マジョリティの特権を考える」と意図的に内容を曖昧にすることで、多くの学生に履修してもらうことを目指している。また、シラバスも特権側に焦点を当てて書くことで、貧困や差別などのキーワードがマジョリティに属する学生を遠ざけてしまわないようにしている。講義では、日本人特権、社会階級特権、男性特権、異性愛特権の4つの特権を意識してもらう。学生にとってとりわけ抵抗感が強いのは、日本人特権と男性特権である。例えば日本人特権を扱う際には、白人特権を例に挙げるなどして学生の抵抗感を考慮した。講義のなかでアクティビティを行ったりマイノリティの方をゲストスピーカーとして話してもらったりする。マイノリティーが自らの体験を語ることは、非常に心理的負担が重いため、学生(マジョリティ)側がゲストスピーカーの話を他人事として聞かないよう気を配っている。また、この講義はオープンコースウェアで授業を配信されており、上智大学の外にも開かれてい

る。近頃は、企業の人権研修、小中高の学校の研修にも呼ばれることが増え、こうした問題意識が高まっているように感じるという。

【フリートーク】

A先生

日本の社会のなかで例えば在日朝鮮人がどのような企業に就職しているのか等のデータを使うことはありますか。

→データはあまり使いません。課題も様々な文献や動画を観てもらい、それに対してどのように感じたかというのを書いてもらっています。

B先生

成績評価の方法についてお伺いしてもよろしいでしょうか。

→ほぼ毎週課題を出し、それを4点満点で採点しています。また、出席点もつけています。学期の最後には、自分の持つ特権についてレポートをA4で3-4頁で書いてもらいます。それらを総合して評価をつけています。

C先生

マジョリティの抵抗感を避けるためにシラバスなどで「差別」という言葉を極力使わないということでしたが、授業のなかではどのようにしていますか。またどのような学生が講義を履修していますか。

→授業のなかではこうした言葉を使わざるを得ませんが、マジョリティの学生が受け入れやすいように常に配慮しています。人権問題などに興味がある学生は、ロコミなどで授業について聞いて参加してくれます。例えば、在日朝鮮人学校から上智に来た学生が高校の先輩から勧められて履修したということもありました。マジョリティの側に属する人間がマジョリティの特権を指摘することが、マイノリティをエンパワーメントすることになるのかもしれない。

D先生

留学生はこの講義に参加していますか。

→全学部共通ということもあって、留学生はあまりいません。卒業単位のために履修している学生が多いのかもしれませんが。履修者のなかに韓国や中国の学生がいますが、とても積極的に授業に参加してくれます。学生が寝ることや授業中に携帯やPCを使うことも禁止しています。ゲストスピーカーを呼ぶ環境を作るためにも必要なことです。

D先生

上智大学の学生は、自分を「普通」だと思っているとはどういうことでしょうか。特権がな

いと思っているのでしょうか。

→多様性のある環境で育ったのが小学生の頃くらいで、あとは私立の中学校や高校へと進学するため、同質な家庭のバックグラウンドを持った学生が多いです。そのため、学生は、自分の特権を意識していることはあまりありません。授業のなかでは、例えば養護施設を出た人と比較して自分たちの持つ特権に気付いてもらいます。

【司会者コメント：A先生】

Professor Deguchi's research into privilege and her methodology for getting students to understand their own privilege was extremely useful for everyone present. In some ways I felt that we should all, both professors and students, be exposed to her work at regular intervals. It is so easy in a privileged institution like Sophia University (despite its commitments to social justice and other liberal causes) to forget how privileged we all are to be there. Students at Sophia seem to be becoming more and more removed from any sense of "social reality" and we all discuss this frequently, but find it hard to address the causes of this removal. It is of course very hard to change this overnight, but Professor Deguchi offered some fascinating practical examples for us to work with and use in our teaching practice. No wonder her classes are always full.

以上

2019年度第6回 ランチタイムフリートーク 報告書

1. 主 催 外国語学部
2. 講 師 名 ジョン・ウィリアムズ 教授 (外国語学部英語学科)
3. 日 時 2019年11月12日(火) 12時45分～13時20分
4. 場 所 2-915 (英語学科会議室)
5. 出 席 者 10名
(出席者詳細は別紙)

6. 内 容

映画におけるホールとは、脚本上の欠点や物語の些細な矛盾ではなく、物語の構造そのものに問いを投げかけるような空白を意味する。ホールは、それ自体において、映画を構成する上で有益な要素として機能し得るといえる。ホールの説明のために挙げられた具体的な作品は、村上春樹の小説、鈴木清順が監督を務めた『ツイゴイネルワイゼン』、イ・チャンドン監督の『バーニング』、そして、ジョン・ウィリアムズ先生自身が監督を務めた『スターフィッシュホテル』である。

これらの作品では、ホールがプロットを構造する上で重要な役割を果たしている。以下は、その特徴である。普通であればストーリーが展開するにつれて明らかになる情報を意図的に留保すること。登場人物たちの語り一つ一つの食い違いが単純な正誤へと解決されないこと。他者や過去について知る能力に対する根本的な疑問。同時に矛盾した解釈が成立するようなプロット、などである。

例えば、『バーニング』において、普通の映画では明かされるであろう多くの謎が結局最後まで明かされることがない。作家のイ・ジョンスが恋に落ちたシン・ヘミが語る、かつて家の近くにあった井戸の話や、若くして財産を築き退屈な生活を送るベンが趣味にしている納屋を焼くこと、シン・ヘミの失踪など、多くのシーンがはっきりとした解決のないままに映画は幕を閉じる。こうした映画のなかに組み込まれたいくつものホールがそのままこの映画の構造をなしている。つまり、クレジットカードの負債や韓国のバブル経済が象徴しているような社会全体の空虚さそのものが、映画のなかのいくつものホールによって描き出されているのである。

・フリートーク

B先生

ホールが多いほど観客には理解しがたいものになるのでしょうか。

→イ・チャンドン監督は、そのように言っています。観客を得るには、はっきりと謎が解決される方がいいのかもしれませんが。

B先生

こうした作品を学生に授業のなかで見せると、映画のなかで何が起きているのかインターネットで調べたりする学生がいます。ハリウッドスタイルの映画に慣れすぎているように思います。ジョン・ウィリアムズ先生はどのように授業のなかで映画を活用していますか。

→まずは、比較的わかりやすいものから学生に見せるようにしています。そうすることで、学生も普段見慣れた映画との違いに驚いてくれることがよくあります。

【司会：**C**先生のコメント】

映画におけるホールが作品によってさまざまな意味概念をもつことを示したうえで、ホールを作品全体の構造から捉えるという斬新な切り口を基に映画批評を試みた、きわめて興味深い報告でした。

ホールは空虚であること自体に実は深い意味があり、作品のなかで独立した構成要素であり、独特の磁場になっている点が、ホールの概念を押し広げていくうえで重要ではないかと思いました。

映画には決まった見方があるのではないかと思いついて、作品を観る前からいろいろ調べる人もいるでしょうし、ハリウッド映画に多いハッピーエンドに慣れてしまった観客もたくさんいるでしょう。そのような囚われから解き放たれて素直に作品世界に浸ることの大切さは、読書についても言えることです。学生に考えてもらいたい鑑賞法だと思います。

映画を研究するのみならず、自らカメラを回す監督としても知られるウィリアムズ先生のお話は、映像の解析や創作手法にとどまらず、撮影現場の経験にも裏打ちされた具体的な内容を伝えるものでした。

以 上

2019年度 第7回 ランチタイムフリートーク 報告書

1. 主 催 外国語学部
2. 講 師 名 大塚 祐子 教授 (外国語学部英語学科)
3. 日 時 2020年1月14日 (火) 12時45分～13時20分
4. 場 所 2-915 (英語学科会議室)
5. 出 席 者 11名
(出席者詳細は別紙)

6. 内 容

- ・トンガ語の関係節処理：統語的能格性が目的語選好に与える影響

ランチタイムフリートークでは、英語学科の大塚先生に、トンガ語の関係節処理に関する研究について発表していただいた。トンガは、文の基本語順が特殊な言語に属している。例えば、英語の基本語順は、actor (行為者・する人)、action (行為)、undergoer (行為を受ける人) となる。日本語であれば actor、undergoer、action である。多くの言語の基本語順が actor、action、undergoer あるいは actor、undergoer、action となるのに対して、トンガ語は、action 最初に来てその後に actor、undergoer と続く。動詞が文頭に来る VSO 言語は、類型的に見ても少数語に属する。

トンガ語のさらなる特徴として Nominative-Accusative 言語ではなく Ergative-Absolutive 言語であることを挙げるができる。Nominative-Accusative 言語において、一人の行為者が関係する動詞の主語 (ex. John smiled. という文の行為者 John) の形は、二人の行為者が関係する動詞の主語 (例えば John kissed Mary) の形と一致する。しかし、Ergative-Absolutive 言語では一人の行為者が関係する出来事の主語の形と一致するのは、二人の行為者が関係する動詞の目的語となる。つまり、英語で例えるならば、Ergative-Absolutive 言語において He smiled. の主語の形と一致するのは、Mary kissed he. の目的語となるのである。

先行研究文処理に関する先行研究では、主語関係節の方が目的語関係節よりも一般的に理解し易いという結果が複数の言語で得られているという。つまり、主語関係節を含んだ The lawyer chased the pilot who was very tall. という文の方が、目的語関係節を持つ The

lawyer chased the pilot who the bus driver saw.のよりも容易に文を処理できるのである。大塚先生の研究は、目的語関係節よりも主語関係節が理解しやすいという傾向があらゆる言語に見出すことができるかどうかトンガ語において検証することにある。実験の結果、トンガ語では、目的語関係節よりも主語関係節の方が理解に時間がかかることが明らかになった。その理由は、トンガ語が Ergative-Absolutive 言語に属することにあると推測することができるという。

[フリートーク]

Q. A 先生、B 先生

ドイツ語では各の役割がはっきりしており、文脈によって目的語を文頭に出すことがよくあると思います。

→もちろんコンテキストと言語は、本来切り離せないのですが、心理言語学ではまずコンテキストがない状況でどのように人が文を理解するかを分析し、その後文脈がある場合はどのようになるか別に実験します。

Q. C 先生

実験を行った地域では英語がよくつかわれているようなのですが、例えば61人の被験者のなかで英語が堪能な人は、理解力が異なるなどについて個別的にデータを見たのでしょうか。

→まだ個別にデータの分析はしていません。ただしそれぞれの被験者にトンガ語と英語の読む・書く・聞く・話す能力についての自己評価を調査しています。今後そのデータを見て行く可能性はあります。

【司会：D先生のコメント】

Professor Otsuka's talk was really fascinating and generated ideas that led to broader fields of enquiry into the nature of the human mind. I was particularly interested in the idea of how more complex grammatical forms, or less familiar grammatical forms are more difficult to listen to and process. The research obviously has a lot of implications for the way that people speak in general and how people "get their messages" across, for example teachers and politicians. At the same time Professor Otsuka's presentation was a model of clarity. (I had been worried I would not understand it as I am not a linguist.)

以上